

語彙力につながる漢字の学習

生田聡史

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: ikuta_st@fuzoku.tottori-u.ac.jp

Satoshi IKUTA (Tottori University Junior High School) : Learning of Chinese characters that enhances the word-hoard

要旨 — 語彙力が学習において重要であることは言うまでもない。しかし単に語彙と言っても、音声としての語彙と文字としての語彙とでは違いがあり、その違いは個々で大きく開きに差があるように思われる。そこで、漢字の学習を中心に据えることで言語に対する興味やこだわりが深まり、その意識が文字としての語彙を増やすだけではなく、音声としての語彙との開きを縮めるのではないかと考えた。国語の授業で漢字の学習をする時間を確保し、その実践を重ねた上での生徒の変容を考察する。

キーワード — 語彙力, 語彙, 漢字

Abstract — Needless to say, affluence of the vocabulary is important in the learning. However, the vocabulary as sounds is different from the vocabulary as letters and it seems that difference between them is variable in magnitude depending on every word. It might be possible that if learning and practice of Chinese characters were settled as the central subject in the classes, students can deepen their interest and intimacy for languages and enhance their vocabularies as letters. This might be also useful to lessen dissociation between the Chinese characters as letters and sound. In this article, I will discuss students' progress in the word-hoard after securing a certain amount of time to learn Chinese characters in the classes of Japanese language.

Key words — word-hoard, vocabulary, Chinese characters

1. はじめに

1.1. 生徒の実態

本年度から鳥取大学附属中学校（以下、本校）に勤務し始め、3年生を担当することになった。3年生の多くは自分の思っていることを流暢に述べられていると感じた。これは前任者が話し合い活動を多く取り入れていたという情報を得ていたので、納得のいくところであった。ところが年度当初、ほとんどの生徒が授業中にノートをとっていないことに気付く。そこで文字を書かせるために、ノートに詩の感想を書かせたり、授業の最後に振り返りカードを記入させたりした。すると、話し言葉の流暢さとは裏腹な、平仮名の多い幼稚な印象を受ける紙面が多く見られた。また、漢字の使用については誤字も多く見られた。この現状から、本校の3年生には音声による語彙と文字としての語彙に差が生じているのではないかと考えた。

1.2. 実態からの仮説

本校の研究主題「自立し、つながり、探求し、創造する力の育成」の副題となっている『『やりくり』のたたとえば』の、国語での「やりくり」の一つとして、初めて見聞きする言葉でも意味を想像し大きく捉え違いをしないことが当てはまるのではないかと考えた。とりわけ、抽象的概念を表す熟語において、その漢字の持つ意味からその熟語の意味を類推できることは、現段階の語彙を利用し更に語彙を広げていくことになり、まさに「やりくり」になるのではないかと考えた。熟語の意味を語彙として身につけていくためには、漢字の理解に回帰する。基本的な漢字指導の手法を今一度見直し、その精度を高めることで、生徒の漢字への興味や関心が高まり、理解し使っていこうという意欲につながるのではないかと考えた。そこで仮説として、「漢字の学習を深めていけば、語彙は理解した文字数以上に増えていく」として授業実践をした。

2. 実践

2.1. 一文字ずつの漢字

2.1.1. 指導の内容

授業の始まりに毎時間漢字5問テストを行う。出題は新漢字教室2136字(創育・吉野教育図書)の2級(中3相当)の最後から熟語を中心に5問ずつ出題する。解答の段階で、漢字一文字ずつの解説を行う。解説は基本的に以下の内容である。

- ・漢字の音読みと訓読み(読みは常用漢字表以外も積極的に伝えた。)
- ・六書の確認(詳しくは2.2.で)
- ・形声文字の場合、同じ音符を持つ漢字の確認例)「瞭」

「寮」の部分「リョウ」と読む。「寮」の部分にも「木を組んで火が燃えている」という意味があり、「目(めへん)」と合わせて「あきーらか」という訓読みがある。会意形声文字である。「寮(リョウ)」が付く文字は「寮・僚・療・遼・療」などがある。

2.1.2. ねらい

中1相当の4級から復習を兼ねて行いたかったが、本年度の授業時数では中学校配当の1130文字は網羅できないことと、2級の文字が日常ではあまり使用されないため、語彙を広げるといった目的には適当であろうと考えた。また形声文字を中心とする画数が多い文字は生徒には敬遠されがちであるが、漢字の成り立ちを考えれば、漢字を覚えることは画数の問題ではないことを実感しやすいであろうと考えた。加えて、2級の複雑な文字を扱うことで、2級以下の漢字に対しても文字の理解の手順が応用できるのではないかと考えた。これらの理由により2級から遡ることにした。

2.2. 六書の確認

2.2.1. 指導の内容

- ・「象形(形を象(かたど)る)文字」身近にあるものを単純な形にして表した。普通の生活に関わるものが多く、画数は少なめである。
- ・「指事(事柄を指し示す)文字」身近ではあるが形に表すことが難しく、記号として表した。普通の生活に関わるものが多く、画数は少なめである。

- ・「会意(二つ以上の意味を合わせる)文字」形や記号としては表しにくい、より物事を豊かに表そうと、象形や指事を二つ以上合わせたもの。二つ以上の文字の意味を合わせることで、より複雑な意味を表せるようになり、画数は多めになる。
- ・「形声(形(意符)と声(音符)とを合わせる)文字」読み方(中国語であるから音読み)を表す音符と、意味を表す意符(部首)を組み合わせたもの。同じ音が多い中国語だからこそ部首との組み合わせで、意味の細分化と文字数の大量化が図られ、画数が多くなる。
- ・「転注(意味が転じた)文字」元々の読みと意味があったものの、長い年月の中で別の意味が付け加わった(あるいは別の意味になった)もの。(例:楽・令)
- ・「仮借(仮に読み方を借りた)文字」元々の意味から離れ、読み方だけ使われるようになったもの。(例:可口可楽コカコーラ・肯德基ケンタッキー)

2.2.2. ねらい

中学1年での既習内容ではあるが、漢字を覚えることに強く苦手意識を持っている本校3年生に、漢字の成り立ちの捉え直しをさせたいと考えた。

漢字は人間の生活の中で必要に応じて作られてきたものである。身近な事物を表す文字ほど単純である。しかし、概念的であったり抽象的であったりする事物を表そうとすれば、単純には表せなくなり、人間の工夫の結果、部分(パーツ)の組み合わせでより複雑な意味を表す方法が生み出された。特に「形声文字」は画期的な文字の作り方であり、音符と意符との組み合わせにより文字数を飛躍的に増やすことになる。

このような歴史や人間の工夫を知ること、単純に画数が多い文字は難しいという捉え方から脱却し、意図を持って組み合わせられているという意識を持たせたかった。

なお、六書の名前を単に紹介するのではなく、熟語の構成(詳しくは2.4.で)を意識した意味の捉え方で指導した。

2.3. 音読みと訓読みの確認

2.3.1. 指導の内容

- ・音読みは中国から伝わってきた読み方が基本

となっている。その読み方だけでは日本人には意味が理解しづらい。

- ・訓読みは中国からもたらされた漢字に日本人がその文字に合う和語を乗せた。その読み方で日本人は意味が分かるが中国人には理解できない。

2.3.2. ねらい

中学1年での既習内容であるが、訓読みが意味の分かる読み方で音読みが意味の分からない読み方という認識の捉え直しをさせたいと考えた。漢字は元々中国で作られた文字であるから中国語である。つまり、読みの基本は音読みである。これは前述の形声文字における音符を考える上で重要で、文字が作られる時は中国語（音読み）で作られているということを意識する必要がある。音読みを基本に読んでみると、音符をより意識的に捉えられると考えた。ただし、日本人として文字の意味を捉えるならば、訓読みの方が断然理解しやすい。つまり、漢字の作られ方としての音読み、漢字の意味としての訓読みの両方を知っていく必要がある。

また、本（ホン）、菊（キク）、愛（アイ）のように訓読みだと誤解しやすい読み方も、当時の日本にはそれらの概念がなかったことを考えれば音読みであると理解できる。このことも指導のねらいの一つである。

2.4. 熟語の構成

2.4.1. 指導の内容

- ・二つの漢字が対義語になっている。
- ・二つの漢字が類義語になっている。
- ・上の漢字が主語、下の漢字が述語になっている。
- ・上の漢字が下の漢字を修飾している。
- ・下の漢字が上の漢字の目的の語になっている。
- ・上の漢字が接頭語である。
- ・下の漢字が接尾語である。
- ・省略された熟語である。
- ・同じ漢字を繰り返す。

2.4.2. ねらい

中学2年での既習内容である。熟語の意味を考えるには漢字一文字ずつを意味の分かる読み方で捉える必要がある。しかし一文字ずつでは熟

語の意味にまでいわず、語彙の獲得にならない。熟語の構成のパターンを理解し、それに合うような熟語の読み方を身につける必要がある。そこで、文法の学習や漢文の学習がある程度進んだ3年生が、改めて熟語の構成を捉え直すことは非常に有効であろうと考えた。そしてこの熟語の構成を理解し、熟語を理解できる読み方で読んだ時、抽象概念の意味さえも生徒はイメージできる言葉として落とし込み、新たな語彙になると考えた。

2.5. 脳内漢字変換

2.5.1. 指導の内容

「言葉を耳にする時、いつでもその言葉を頭の中で漢字に変換するよう心がけよう。」と、日常での思考の方法を助言する。

*このような思考方法を「脳内漢字変換」と呼び、本校3年生の間で使っている。

2.5.2. ねらい

漢字は文字としての情報であるが、音声としての情報を文字化する作業を思考の中で行うことで、音声の情報と文字としての情報がつながるのではないかと考えた。つまり、音声としてしか認識していなかった言葉が、意味のある文字（熟語）としても認識され、意味のある言葉として生徒の記憶の中にとどまり、語彙となっていくのである。しかし、この脳内作業は容易なことではなく、前述の全ての実践で身につけてきた漢字の捉え方が有機的に働くことによって可能となってくると考える。故に、脳内漢字変換は即効性のある指導とはなりがたい。それでも、脳内漢字変換の意識を持って思考をする習慣が身につけば、その生徒の言葉への意識は飛躍的に高まり、語彙は格段に増えていくだろうと考え、折に触れて脳内漢字変換を意識するよう促している。

3. 成果と課題

3.1. 生徒の変容

3.1.1. アンケート調査

12月中旬に14の質問で本校3年生137名のうち、135名（2名欠席）にアンケート調査を行った。

その中で、特に1と5、3と7、またその理由として6と8の回答を中心に見ていきたい。

1 中学2年生以前、あなたは国語という教科にどのような手応えを持っていましたか？もっとも近いものを選んでください。

- A 得意である B どちらかと言えば得意である
C どちらかと言えば苦手である D 苦手である

3 中学2年生以前、あなたは国語という教科をどう感じていましたか？もっとも近いものを選んでください。

- A 好きである B どちらかと言えば好きである
C どちらかと言えば嫌いである D 嫌いである

5 中学3年生以降、あなたは国語という教科にどのような手応えを持っていますか？もっとも近いものを選んでください。

- A 得意である B どちらかと言えば得意である
C どちらかと言えば苦手である D 苦手である

6 5の回答について、具体的に書いてください。

7 中学3年生以降、あなたは国語という教科をどう感じていましたか？もっとも近いものを選んでください。

- A 好きである B どちらかと言えば好きである
C どちらかと言えば嫌いである D 嫌いである

8 7の回答について、具体的に書いてください。

いようであるが、現時点ではずいぶん苦手意識は減少していることが分かる。また、好きか嫌いかの選択では好きな方が約25%増加している。

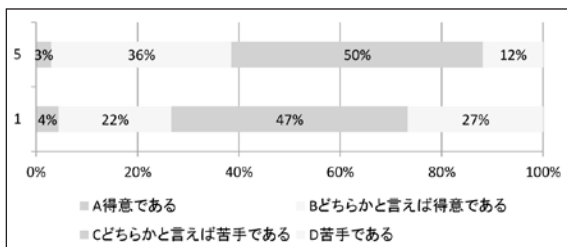
グラフ1. グラフ2. とも好転していると言える。

この好転の理由を、6・8の回答から抜粋する。

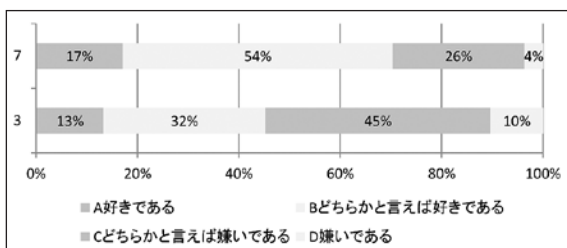
- ・漢字に興味を持てた。漢字が書けるようになった。
- ・文章を読むことが好きになった。
- ・語彙力がついてきた。
- ・文章を読んで作者（筆者）の気持ちや伝えたいことが分かるようになった。
- ・テストの答え方が分かるようになった。点が上がってきた。
- ・言葉に注目するようになった。
- ・根本的なことから分かるようになった。

等である。これは本実践のねらいに合致したものである。特に、期待以上であったのは文章を読むことへの抵抗感が薄れていたり、文章の読解にまで良い影響が現れたりしていることである。

3.1.2. アンケート調査結果



グラフ1. 得意か苦手か



グラフ2. 好きか嫌いか

3.1.3. アンケート調査から

「得意」か「苦手」かと「好き」か「嫌い」かの二つの観点で現時点と中学2年以前とを比較してみたいと考えアンケートを行った。グラフ1.は得意か苦手か、グラフ2.は好きか嫌いかを割合で示した。いずれも上段が現時点である。また、右側がネガティブな回答である。得意か苦手かの選択ではいずれも苦手意識の方が強

3.2. 成果

漢字という表意文字を、先人の知恵や工夫という歴史的な側面からも捉えていくことで、一文字ずつに対する興味や関心がわいてきているようである。そしてそのことが漢字を理解することにつながり、さらには語彙の獲得にもつながっている。また、文章を読んで分かるようになった、という記述は、学習して獲得した語彙だけではなく、漢字から抽象的概念を類推することで意味を捉えているということを示しているのではなかろうか。そして、分かるという意識が、結果的に苦手意識の克服や国語が好きであるという意識に発展したと考えられる。

漢字の学習を深めていけば、語彙が増え、国語好きが増えていくようである。

3.3. 課題

「漢字が嫌い」「覚えることが苦手」との回答が4名、「漢字学習の時間が長い」との回答が2名。この生徒たちをも納得させる授業展開を考えていきたい。

また、今回のデータは客観性が乏しいので、次回からは計画的に情報収集を行い、より客観性のある研究にしていきたい。